

題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」

発行所

(一財)日本友愛協会

〒112-0002  
東京都文京区小石川  
1-10-13 小石川文芸ビル2階

TEL:03-5684-3188

FAX:03-5684-3186

E-mail:yuai@yuaikyoukai.com

http://yuaikyoukai.com

発行人：川手正一郎

編集人

隔月1回 10日発行

年会費  
2,000円



写真解説 上段左より／鳩山由紀夫副理事長／鳩山邦夫理事長・大会会長／閉会の辞を述べる奥田吉郎理事を讃え登壇した理事長、副理事長、評議院長／中段左より 鳩山安子名誉会長の遺影を飾った祭壇／今を盛りと咲くバラの花／母が千の風になって今日を運んで来たみたいですよと挨拶。井上和子評議院長／下段左より／奥住壽監事(左)と山木弘行けん玉道八段保持者。今回の立て役者のお二人／満面の笑顔で挨拶。川手正一郎実行委員長／鶴巻克雄顧問が乾杯の発声

# 日本友愛協会創立60周年記念大会開催

## 音羽の庭に全国から同志が集結

五月十九日(日)五月晴れの空の下、満開のバラが妍を競う鳩山会館に、同志が集結した。昭和二十八年四月二十九日、ここ音羽で産声をあげた「友愛青年同志会」は、六十年の年月を経て、現「日本友愛協会」へと継承されてきた。その「創立六十周年記念大会」が開催され、二百名に近い同志が一同に会した。

### 快晴の記念日

平成二十五年度事業計画に「創立六十周年記念大会」が織り込まれ、実行委員会が設置された。理事会で大会開催日が検討され、敢えて創立日の四月二十九日を避け、五月十九日を選んだのは、満開のバラで皆様をお迎えしたいとの意向からだ。これを受けて開催を重ねた実行委員会では、細かい打ち合わせを行ってきた。しかし、一番の懸念「天候」に関しては、最後まで気を揉んだ。予報は雨、百名以上が一枚に収まるという「記念撮影」を実現させるには、天候が要となる。無情な雨の予報に、祈るような気持ちで迎えた十九日であったが、一転五月晴れの天恵を賜った。

### 全国から同志集う

北海道から、九州から、四国から、正に全国から同志が集結し、その数は百八十名を越えた。久しぶりに会う仲間、中には十年ぶりという方もある。しかし顔を合わせると「おう」の一言で、歳月の隔たりは消え、往年の「同志」となる。

来賓として参加された脳科学者茂木健一郎さんが

「この集まりを拝見して、友愛とは何か、少し解ったような気がします」と語られたが、「友愛」の二文字が結んだ友情、志を掲げた情熱、人としてなにを尊ぶかという理念、それらを共有し生きてきた多くの同志の「証」が、今日結集しているといえるだろう。鳩山安子名誉会長の遺影が見守る記念大会

会はずまず本年二月十一日に亡くなられた、鳩山安子名誉会長への黙祷から始まった。司会進行は芳賀大輔実行委員が務める。これまで友愛協会を牽引してきた川手正一郎実行委員長、鳩山邦夫大会会長、奥田吉郎副理事長、井上和子評議院長と挨拶が続き、同じく永年牽引役を務めた鶴巻克雄顧問の乾杯で、宴へと移った。

奇跡の一枚・笑顔の集い  
乾杯の前に、参加者全員での記念撮影が行われ、総勢百八十余名がカメラに収まり、鳩山会館を背に見事な記念写真が出来上がった。(写真左)

日本けん玉協会の理事長を務める本協会監事の奥住壽先生のご好意で、山木八段による妙技披露、けん玉の贈呈があり、会場は和気藹々一色になった。



### 友愛時評

▼参院選の真つ最中である。直前の都議選の結果によって結果がほぼ予想される状況では盛り上がり欠けるさらいも否めないが、友愛関係者には「熱い夏」を過ごしている方々もさぞ多いことだろう。▼この時期、英国での選挙運動に同行した時の記憶が蘇ってくる。一〇年近く前のEU議会選挙の際のことである。

▼英国の選挙戦は(日本では禁止されている)戸別訪問が中心だが、EU議会選挙の場合は次の下院選挙までの「中間選挙」的な性格もあり、党員や支持者へのチェックとテコ入れに運動の主眼があった。EU議会議員、国会議員、地方議員など数名が、戸別訪問先での選挙民の反応も共有しながら、その地域が抱える問題をゆつくり議論して歩く、という選挙活動である。

▼この最も印象に残った「散歩」の時間以外にも、電話での投票依頼や繁華街でのブリスを出したキャンペーン、選挙戦略をめぐる公開討論、選挙カーでの遊説(bussing)等の選挙活動も体験した。▼だが、選挙活動の総計の時間も短く、ほとんど睡眠時間はとれないかも……と覚悟していた筆者は拍子抜けする思いで「この程度の選挙戦でいいのか」と再三聞くほどであった。

それに對する回答は異口同音に「無理をしても仕方がない」「選挙戦の期間は、選挙区や国政、EUの問題をゆつくり考える時間でもある」というものだった。▼議会政治の母国である英国並みとはいかないにせよ、選挙をフルに活用し、選挙後の政治に実質的な痕跡を残すような熱情的な選挙運動が実現しないものか――そんなことを思いながら選挙カーからの連呼を聞く日々である。(ヒゲ)



## 第六回定時評議員会 第十五回通常理事会 平成二十四年度事業報告承認 平成二十四年度計算書類承認 鳩山由紀夫理事長を選出

平成二十五年六月十四日  
(金) 友愛サロンに於いて、

平成二十五年度第十五回通常理事会、および第六回定時評議員会が開催され、それぞれ平成二十四年度事業報告、平成二十四年度計算書類、公益目的支出計画実施報告書が承認された。

午前十時から開催された理事会では、鳩山邦夫理事長の挨拶に続き、定足数確認が行われ、理事会は成立した。続いて、奥住壽、長田正太郎両監事による監査報告がなされた。協議に移り、平成二十四年度事業報告、及び平成二十四年度決算にあたる計算書類が承認された。

併せて、平成二十四年度公益目的支出計画実施報告書(内閣府提出)の承認が行われた。

出席理事  
鳩山邦夫理事長・鳩山由紀夫副理事長・川手正一郎  
常務理事・武田紀年男理事・木村正治理事  
出席監事  
奥住壽監事・長田正太郎監事

.....  
理事会に引き続き、午前十一時より評議員会が開催され、理事長に代わり、鳩

山由紀夫副理事長が挨拶を行った。

評議員会の定足数の確認がなされ、定足数を満たしていることから、成立が宣言された。

井上和子評議院長が議長に就任し、鳩山由紀夫副理事長に、理事会の報告を求めた。

資料を基に、平成二十四年度事業報告、計算書類などの詳細にわたる報告が行われ、併せて監査報告、公益目的支出計画実施報告及び監査報告がなされた。協議に入り、第一号議案、第二号議案である平成二十四年度事業報告、及び計算書類、公益目的支出計画実施報告書は、それぞれ承認された。

第三号議案に移り、今理事会を以て理事全員が任期満了を迎えるため、新理事の選任について協議がもたれた。結果、現理事全員に対し、留任の意向が固まり、全会一致で現理事重任を決議した。即時、出席理事全員が新理事に就任することを承諾した。

また、この後第十六回臨時理事会を開催し、全会一致を以て、理事長に鳩山由紀夫理事を選出した。

# 平成二十四年度事業

# 第二十三次友愛植林訪中実施

## 歴史の街・臨汾市第一期 遼寧省の期待を担う街・錦州市 文化の源流を訪ね、広原に緑を植える 中国を実感した旅

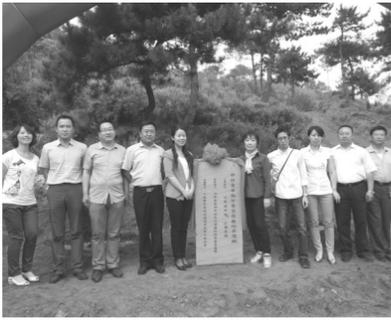
第二十三次植林訪中が実施された。今回の植林実施場所は、山西省臨汾市、遼寧省錦州市の二か所である。これは平成二十四年度植林事業として計画に挙げられていたもので、天候の都合などから二十五年六月の実施となった。そのため通常の植林訪中団を組むことなく、事務局から一名、学生参加として川手祥右さんの二名が派遣された。

実施の遅れから気をもんでいた現地からは安どの声があり、熱烈歓迎を受けた派遣員は、滞りなく行われている植林の進行状況を確認して、予定通り二十二日に帰国した。

太原経由で臨汾市へ

羽田から北京経由で山西省の省都太原(タイゲン)へ、それでも移動に一日かかった。ここで今回の植林事業の関係者が一堂に集い顔合わせを行う。翌朝、約三〇〇キロの距離を車で移動、臨汾市の現場に到着した。現地のボランティアの学生達が、起工式(植樹祭)のためのやや大きめの苗木を用意して待っている。植林事業地は、一見すると緑

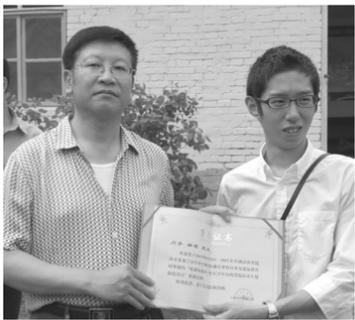
大きく育った時に見つけられるようにと、記念碑の傍に植樹



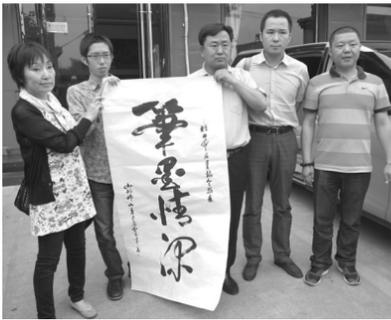
記念碑を囲んで、関係者一同で記念撮影。地元の方々が今後木々の成長を見守ってくださる



最年少参加者、川手祥右さんに、参加証書が手渡された



砂の混じった土に植えられた苗(コノテカシワの種)強く、大きく育て! 折らずにはいられない



日本友愛協会に贈られた、臨汾市の著名な書家、李斗辰先生の書「筆墨情深」見事な作品である



その昔、中国各地に臨汾市から人々が移住。正に「根」の地だ



三十年來の友人、王樟生さん(右二人目)が訪ねて来た。旧友の孫に「目会いたい」と、不自由な足で



臨汾市は、山林のみならず、河川の護岸植林にも力を入れている。十年計画の都市化と同時進行だ

「医食同源」を実践しているような、中国四千年の食文化が感じられる、素晴らしいものだった。永年の友人 洪桂梅さんの故郷で初めての事業 飛行機で太原から瀋陽へ。こちらも古い歴史の街だ。今回初めて遼寧省での植林事業がおこなわれるが、遼寧省は日本友愛協会が植林活動を始めた時から、担当者としてご尽力くださっている中華全国青年連合/国際青年交流中心の洪桂梅さんの故郷だ。十年余を経て初めて彼女の故郷を訪ねる機会に恵まれた訳だ。瀋陽からまたしても二〇〇キロ余の道のりを車で移動して、事業実施現場錦州市に向かう。そして再び、中国の広さを思い知らされる。今回は高速道路をひた走ったのだが、それでも見えるのは地平線ばかり。日本で地平線が見えるのは?と思うと、格段の差に驚くしかない。

広大な砂地・緑化の意義 旅の行程も残すところ一日、早朝から錦州市の現場に向かう。朝から強い日射しで気温もどんどん上昇、起工式現場で待っていてくださった四〇〇名の学生さん達が、気の毒になった。すでに植えられた小さな苗が、見晴らす限りの広原に続いている。しかし、土を手で握ると、さらさらと指の間からこぼれるほど、砂の交じった乾いた土である。この現場の木々の育成を担当される方は、大変だと思った。しかし、そういった砂地だからこそ木を植え、保水し、砂の飛散を防



参加証書を受け、握手を交わす。植林を通じての日中友好を實踐



広原に植える一本の木。周りにはさらに小さい苗が植えられている



広大な土地、砂の多い土壌、ここに緑に変えるべく四〇〇人が集結



記念碑も広大さに負けぬ大きさ。木々で埋もれる日が待ち遠しい



見渡す限りの地平線。小さな苗が、更に小さく見える



見渡す限りの地平線。小さな苗が、更に小さく見える

